

# 心そのままに

愛成学園施設長

片山 泰伸

愛成学園と初めて出会ったのは、1980年の春、養護学校義務化の翌年でした。当時、よく目を通した本は、福井達雨さん著の『僕たちアホやない人間や』『僕たち太陽があたらへん』『生命かつぐって重いなあ』であったり、糸賀一雄さん著の『この子らを世の光りに』『愛と共感の教育』でした。また、止揚学園の方が描いた絵本『ボスがきた』が出版され話題になりました。

その頃学園はボランティアに対して、大変理解のある施設でした。松野さん・桑原さんがボランティア担当で、お互いの想いをぶつけあう事ができ、ボランティア一人一人の声を大切に下さり、ケースについても丁寧に的確にアドバイスをくれました。夏休みには泊まりこみで、ワークキャンプも体験させてもらっていました。そのせいか、多くの若者達が今、福祉教育の分野で関わる仕事をしています。だから学園は、『人を育てる学園』『自分を大切にしてください』という『想い』が残っています。そして今、決して自分の所有物としてではなく、“I LOVE 愛成”です。

さて昨年秋から、北岡常務理事の旗振りのもとで、職員倫理綱領の作成・2000年作業在り方検討委員会ができました。そしてこの4月から新しい体制で動いています。多くのスタッフは、これまでの仕事量をはるかに超える動きをしています。これまで縦の価値観が支配的だった学園の価値観の水平化に向けての関わりの究極は、皮肉な事に、若手スタッフに特に向けられます。それを受けて、ひとり涙したり・途方に暮れたり、視線が足下にいつてしまったり、『上を向いて歩こう』を口ず

さみながら空を見上げたり。新しい愛成に向かって、様々な表情があります。

それは利用者の方も同じです。縦の価値観に慣らされてきた人生から、自分らしさを見つけていく作業に入ることになるわけですから。戸惑い・怒り・喜び・迷い・悩み・苦しみ・淋しさは当然です。時には、喧嘩もあります。やっとなら、自分らしさの旅に出ることが許される様になったのですから。

その愛成学園の頂に、4月からいます。あたり前の事を、出来るところから始めています。「学園の外で働きたい」という願い。「学園の外で生活したい」「色んな人と出会いたい」という願い。人間として当たり前の、ごくごく普通の願いです。その願いを実現していくことが、私たちに課せられた仕事であると思います。

この当たり前の仕事を特別に思ってしまうと、きっとそこに差別・主従の法則が生まれてしまうのでしょう。

中野の街で口ずさみたいと思っています。「この街が好きさ。君がいるから。この街が好きさ、君の微笑みあるから。歌：高石ともや『街』ヨリ」。

街が、中野。君が、君・愛成・きみ。君の微笑み。愛成の微笑み。きみの微笑み。

この頃中野の街を歩いていると、顔見知りの人に出会うことが多くなりました。さみしくなくなっています。全部利用者の方、職員のお陰です。ありがたいです。想いは、20年前と変わりません。確信出来るのは、利用者が今後は街作りの主人公になるのではないかということ。一緒にやっていきたいです。どうぞ、よろしくお願ひ致します。